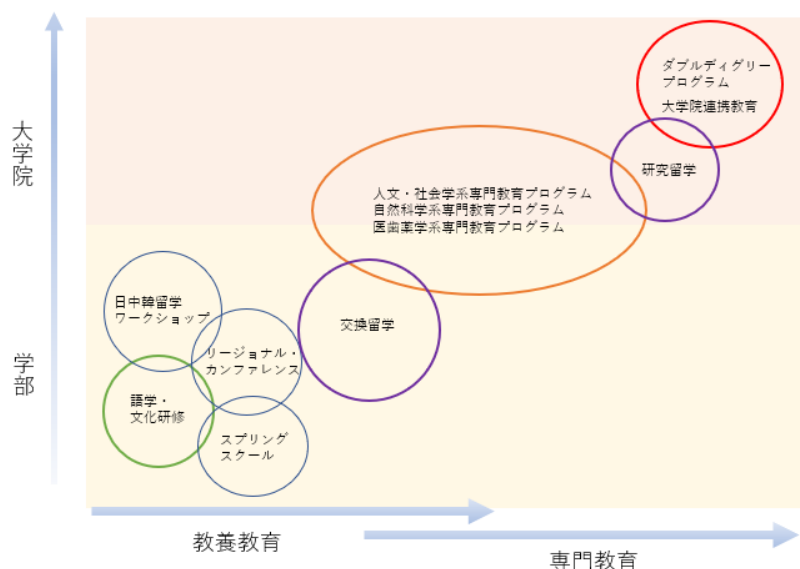


## 取組実績の概要 【2ページ以内】

第2期事業計画は、パイロット事業の基礎に立って、高い学生のモビリティを実現するとともに、教育の質の保証を強化する観点から、専門教育分野における交流の強化、学位を伴った教育の深化を通じて、次世代中核的専門職業人（アジアクラット）を育成することとした。本事業を通じて、学部から大学院に至るまでの連続した教育を縦軸に、また、教養教育をはじめとして、人文・社会学系、自然科学系、医歯薬学系の専門教育の全学展開を横軸に、幅広い活動を行った。



取組は、以下の項目に大別される。

- ①開講科目の充実と履修の体系化
- ②大学間の枠組形成に向けた取り組み
- ③グローバルに活躍できる人材像とそれに基づく交流プログラム
- ④オンライン講義の充実～COVID-19への対応

以下は、その取組概要である。

①中核的高度実践人育成のための授業科目として「CA共通科目」を新たに開設・選定し、履修コースを体系化し、「東アジア・リーダーシップ論」を必修科目とし、指導教員演習科目、全学日本語コース科目、部局専門科目から成る授業科目群から14単位以上取得することをコース修了の要件とした。

②キャンパス・アジア事業を全学体制で実施するため、各学系教員、語学教員、キャンパス・アジア担当教員等からなるワーキング・グループを設置し、事業の進捗状況を確認し、各プログラムの評価、見直しを行った。質保証の一環として、アカデミック・アドバイザーとのマッチングが円滑になるようにするために、理系大学院ではコンソーシアム校研究室同士の相互訪問や、研究活動の情報発信の機会を頻繁に設けた。また、全般においても、プログラム体系が十分に理解できるようにプログラムの周知・広報を行った。具体的に入学生候補の推薦があった際には、指導教員の選定をキャンパス・アジア事務局と各部局との間の緊密な連絡により、ラーニング・アグリーメントの考え方を履修科目指導に活用し、学習・研究ニーズ調査と提供科目のマッチングを行った。このほかに、第1期で作成した共通教科書について、授業等で使用した際の問題点を改善し、新たに共通教科書を作成し、必修科目である「東アジア・リーダーシップ論」で利用した。

③パイロット事業において開発された交換留学プログラムや体験型研修プログラムを基盤として、東アジア、さらにアジア全域で活躍する能力と資質を備えた「就職力」の高い学生の育成を目的に、専門性の深化、キャリア形成を意識した実践型教育、語学能力の向上を柱にプログラムを実施した。専門教育プログラムを拡充し、総計派遣244人（実渡航231、オンライン13）、受入268人（実渡航239、オンライン29）と高いモビリティを維持した。2016年度～2018年度は目標値を上回る交流数を達成した。残念なことに、2019

年度終盤から新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、国境を越えた人の自由な往来が著しく制限されたために、計画していた多くの派遣・受入事業を中止、または、延期せざるを得なかったが、中止した4件の計画を含めると2019年度も目標値を大きく上回る交流数となる見込み（目標値70人に対し、派遣74人、受入102人）であった。また、2020年度は、一部のプログラムをオンラインで実施したほか、オンライン・アカデミックセミナーを開催し、3大学間の交流を維持した。

実施プログラムは、次のとおりである。

交換留学プログラム派遣・受入（共に、吉林大学・成均館大学校）；語学研修プログラム派遣・受入（吉林大学・成均館大学校）；人文・社会学系プログラム・東アジア歴史文化学セミナー派遣（吉林大学等）；人文・社会学系プログラム・海外（中国）法政研修派遣（吉林大学等）；先端医療応用コース医学系・長期受入（吉林大学）；先端医療応用コース薬学系派遣・受入（成均館大学校）；自然科学系プログラム（生命資源科学）派遣・受入（吉林大学）；自然科学系プログラム（有機機能材料学）受入（成均館大学校）；アジア・エリートプログラム受入（吉林大学）

④COVID-19拡大のため、コンソーシアム校同士の往来は極端に制限されたが、3大学コンソーシアムでオンラインによるセミナーや授業を提供することとし、国連が提唱している「持続可能な開発目標（SDGs）」に関連するテーマを中心に実施したほか、文学部及び法学部の専門教育においても、オンラインによるアカデミックセミナー等を実施した。

各大学との密接な連携により、学生の語学力において課題が見られるものの、各プログラム等の目的はほぼ達成され、アジアクラットを育成することができた。

コンソーシアム3大学会議において、各種事業プログラムの他、岡山大学社会文化科学研究科と吉林大学および成均館大学校との間のダブル・ディグリー制度による学生の交換等、本補助事業終了後の自主的な運営に関して、活発な意見交換を行った。第2期のキャンパス・アジアは終了するが、3大学はこれまでに得られた成果に基づき、SDGsに関する社会的課題への貢献を基本方針として、引き続き語学研修プログラム等各種のプログラムを継続することとした。また、コロナ禍において3大学によって行われたオンライン授業の取組みは、今後の交流継続にあたって新たな交流形態として発展させる予定である。

### 【本事業における交流学生数の計画と実績】

（単位：人）

	2016年度		2017年度		2018年度		2019年度		2020年度		合計			
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入		
計画※	40	40	55	55	55	55	70	70	70	70	290	290		
実績	実際に渡航した学生 （以下「実渡航」）		49	51	55	56	65	65	62	67	0	0	231	239
	自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講した学生 （以下「オンライン」）								0	0	13	29	13	29
	実渡航とオンライン受講を行った学生 （以下「ハイブリッド」）								0	0	0	0	0	0

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

**特筆すべき成果（グッドプラクティス）**【1ページ以内】

第2期キャンパス・アジア事業において、以下の特筆すべき成果があった。

**1. 全学体制によるプログラムの実施**

実施責任部局であるグローバル人材育成院の他、人文・社会学系（文、法、経）、自然科学系（理、工、環境、農）、医歯薬学系（医、歯、薬）、言語教育系の教員からなるキャンパス・アジア・ワーキンググループを設置し、全学的な協働体制を整えた。

共通科目（東アジア・リーダーシップ論等）などの共通教育による日中韓の共通理解を深める取組みはグローバル人材育成院において、語学力修得のための語学研修プログラムは基幹教育センターにおいて、学部から大学院まで幅広い専門教育プログラムは、学部・研究科から選出されたキャンパス・アジア・ワーキング委員が中心となって企画・設計し、それぞれの部局で実施した。

長期受入の留学生は、キャンパス・アジア・ワーキング委員との連携の下、当該学生が希望する研究分野の教員とマッチングし、指導教員及び受入部局を決定した。また、グローバル人材育成院のキャンパス・アジア担当教員が、受入部局の指導教員と協力し、学生の履修指導や各種相談に対応した。

長期派遣の日本人学生は全学に公募し、応募した学生の選考は、キャンパス・アジア・ワーキング委員の協力を得て、グローバル人材育成院において実施した。また、派遣前後および派遣中の学生へのフォローアップは、キャンパス・アジア担当教員が行った。

このように、本プログラムを全学体制で実施したことで、学生の受入・派遣を円滑に行うとともに、各部局の取組みを共有し、ピア・レビューを実施し、グッドプラクティスを取り込むことで、プログラムの改善、発展に繋がった。また、幅広い分野でプログラムを実施することで、交流の裾野を広げ、学生交流の高いモビリティの確保に繋がった。

**2. 共通教科書の作成・活用およびキャンパス・アジア共通科目の整備**

3大学の教員が協働で共通教科書を編纂し、キャンパス・アジア共用プログラム（スプリングスクール、日中韓留学ワークショップ、リージョナル・カンファレンスなど）や交換留学生の必修科目（東アジア・リーダーシップ論）で使用することで、アジアクラットとしての共通教育の平仄を合わせ、教育の質を担保した。共通教科書は、日中韓にある基礎的な問題理解について共通認識を固め、学生たちが議論する素材を与える内容であり、3国の学生が議論を通して、互いをより深く理解するツールとして高い教育効果があった。

日中韓に共通する諸課題を取り上げ、3国間の将来を担う中核的高度実践人のための授業科目として「キャンパス・アジア共通科目」を新たに開設・選定し、履修コースを体系化した。また、「東アジア・リーダーシップ論」を必修科目とし、指導教員演習科目、全学日本語コース科目、部局専門科目からなる授業群から14単位以上取得することを本プログラムのコース修了の要件とすることで、プログラムの質保証を行った。

**3. 東アジア・リーダーシップ論・学生フォーラム**

「東アジア・リーダーシップ論」は、本学に受け入れた留学生と派遣した学生が帰国後に履修するキャンパス・アジアプログラムの必修科目である。この科目では、将来の東アジアを産官学各分野で中核的なポジションでリーダーシップをとれる人材育成を目的に、人文・社会学系、自然科学系、医歯薬学系の分野の教員が、それぞれの分野で東アジアに共通する問題や課題についてオムニバス形式で講義を行い、3国の学生が議論し、互いの理解を深めていった。また、この講義の最終回には、学生フォーラムによる学生発表を課しており、中韓の留学生による「持続可能な地域作りとリーダーシップ」というテーマでの発表など、それぞれが留学の成果や東アジアにおける高度実践人について発表を行った。

キャンパス・アジアプログラムに参加する留学生・日本人学生の共通科目にすることで、アジア全体を広い視野に入れて課題を考える極めて重要な機会となった。また、忌憚のない意見の発表という過程を経てプログラム参加者の一体感を作り出すことができた。